

結婚式を終えたその夜、圭吾は、妻となつたばかりの千枝に向かってこう言ったのだ。

「これからは、おれのことよりも、お袋のことを気にかけてやってくれ。頼む。これだけは、どうしても今夜言っておきたかったんだ。」

そして、さらに続けて言った。

「おれは、お袋の子ではない。おやじが外の女に生ませた子だ。」

千枝は動転した。すぐには返事が出なかつた。圭吾の言葉の持つ重大な意味が、少しずつ理解できるようになつたのは、しばらく時がたつてからであつた。

戦後の農地解放後、生きる張りを失つたような

てから、いつそういとしく思うようになった気持ち、君にはわかつて欲しい……」

胸のわだかまりを、はじめて分かち合える相手を得て圭吾は声を震わせたのであつた。

家というものに縛られて、苦しみ抜いた父。自分の腹を痛めたわが子を、すぐに手放さねばならなかつた生母。夫の愛人が生んだ子を、わが子として育てた養母。

父に、養母に、生母にと、揺れ動く情を、心に秘めて過してきた圭吾のこれまでの日々を思いやつて、千枝はただ言葉もなく坐っているばかりであつた。

圭吾と千枝は、この秘密を二人だけのものとし、

日々の中で、信次は、すべてのことを、あからさまに圭吾に語つたのであつた。

それは、村人たちの噂話から、自分の出生の事実をうすうす知つた圭吾が、その苦悩を誰にも明すすべもなく、一人悶々と過していた時期でもあつた。生母、喜乃の写真を、その時、圭吾は父から手渡された。

「しかしなあ。わが子を生むことのできなかつた一人の女が、哀しくもあわれに、母親であり、わが子であると強いて思いこみ、他人の子のおれをこの上なくいとおしんで育ててくれたんだ。

おれはこの純粹な、いじらしい母親をうらざむことはできない。お袋が実の母でないと知つ

生涯誰にも明かすまい、とその夜、固く約束をかわしたのである。

喜乃の写真は、圭吾の机の、鍵のかかる引出の奥深くにしまいこんだ。

あの日……。去年、圭吾がフランスへ出発して二、三日後の初冬の午後を、思い浮かべると千枝は、黒い雲が胸の中をおおいつくすのを覚える。あれは、全く魔物にみいられたとしか思えない恐ろしいできごとだつた。

圭吾の書齋で、一枚の古い写真を手にして、魂の抜けた人間のように坐わりこんでいる露を發見した時、千枝はすべてを察した。

白くそそけ立つた露の顔から、感情のさゆら

ぎがいつさいかき消えているのを見て、千枝はあのいた。

こんなことがあつていいのだろうか。

夢と消えて欲しかった。悪夢であると信じたかった。神のいたずらにしては、あまりにも苛酷であつた。

写真を焼き捨てておけばよかったかも知れない。だが、そうすることのできなかった圭吾の、生母に対する思いも、千枝は読みとることができなかった。

すべては運命なのだ。

愛と善意に満ちた花園に、ぼつかりと口を開けている悪魔の落とし穴を、いったい誰が予測でき

ただろうか。

露をかき抱いて泣いたあの日、千枝は一生忘れない。

圭吾には言わなかった。

この事実を、千枝がどのような言葉をもって、圭吾に告げられるというのだ。

あの時、千枝は、夫に対して、はじめて一つの秘密を持つことになったのであつた。

「そうなるには、一つのきっかけがあるみたいね。」この間、聞いた由利子の言葉を、千枝は反芻してみた。

露が化粧をするようになったきつかけというものがあるとすれば、あの日のこと以外には考え

られなかった。露の日記は、あの前日までで、とぎれていたのである。

胸の中で、曖昧に揺れていた一つの疑心が、いまようやく鮮明な画像となつて千枝に迫つてきた。

あの初冬の日から以後、露の中では何が起こり、何が消え、そして何が残つたのだろうか。とみに表情が乏しくなり、影のようにひっそりと過したこの四か月間の露であつた。つとめて明るく、寄り添つて暮らしてきた千枝ではあつたが、所詮何一つわかつてはいなかったのかも知れなかった。

しかし、女である千枝には、露と同じ世界で思

いを深められる部分が確かに存在した。一枚の写真の出現によって、圭吾に、そして信次に、裏切られたと思ひこんだ露。その衝撃の大きさをゆえに理性を失つた露。あとに残されたのは、みどりごのように無垢に生きる露そのものであつた。

(キレイニナリタイ……)

この呟きには、露という女の八十五年の人生の底流に絶えることなく流れ続けてきた願望が凝縮されている、と千枝は思つた。

それは、気丈な露がその昔、我とわが手でその内奥深く埋めこみ、押しかくしてきた凄絶なまでの願ひだったのである。

喜乃よりも美しくありたい。喜乃よりもきれいでありたい。そして信次に愛され、信次の子を生またかった……。

そう絶叫している露なのだ、と千枝は信じた。露の、声にならない慟哭が、千枝の耳にははっきりと聞えていた。

美しくあることに、かくまで執着しなければならなかった露という女のあわれさが、千枝の胸を切なく打った。

目を閉じると、フランスにいる圭吾の顔がいとおしく見えてきた。

今すぐ会いたかった。会って手を取り、いっしょに泣きたかった。

しかし、千枝は、恐らく自分が露の現実について圭吾に何一つ告げないであろうことを予感していた。

そして、そうすることによって、夫、圭吾に、さらにもう一つの秘密を加えることになるだろうということも……。

ダークブルーのあけぼの色が徐々にうすれて行き、入れかわりに朝日が庭の木々の葉を通して、うす緑色の日ざしを空間に広げ始めた。

千枝は簡単に朝食の準備をすませると、露の部屋へいそいだ。

一刻も早く、露に会いたかったのである。

露は眠っていた。

だが、一度目ざめて再びまどろんでいるのであることは、その顔にいつもの化粧のあとが見えていることでわかった。

心もち、横を向いた露の顔に、レースのカーテン越しの朝日があたっていた。

千枝は、思わず膝をついた。

くつきりと紅でいろどられた露の唇が、日ざしの中で燃えていたのである。

ちんまりとした露のその唇に、女のいのちが、きらきらと輝いていた。

八十五歳の露は、今、まさしく女を生きている。きびしい愛憎の修羅を越えて、ようやく辿り

ついた恋の女を、赤裸々に生きている。

生涯かけて愛されたいと願った人に、とうとう愛してはもらえなかった女。

いくたびも、裏切りと屈辱の坩堝に投げこまれながら、それでもまだその人のために、老いたわが身を装い続ける女。

千枝は、これ程までに、きびしく、いじらしい女の化粧を見たことがなかった。

持ってきた桐の小箱を、千枝はそっと開いてみた。

京都に住んでいる友人から贈られた寒紅である。

紅花を絞って作る京紅は、凍てつく寒中に

仕上げたものほど、冴え冴えとした紅色ができあがる、といわれる。

枕もとに置いた。

〈了〉

(以上5月5日放送分)

白い陶のうつわに塗りつけられた寒紅は、深い紅色をおりおり玉虫色に光らせ、毅然とした美しさをたたえていた。

そっと触れてみた千枝の薬指は、あざやかな色に染まり、指先だけが華やかに息づいた。

きびしく、深く、そしてほとばしるようにあでやかな紅色を持つ寒紅こそが、露の唇をいろどるには何よりもふさわしいのではあるまいか。

女の真冬を生きてきた露の化粧には、もっとも似つかわしいのではあるまいか。

寒紅を納めた桐の小箱を、千枝は静かに露の